

株式会社インタラクティブィ 番組審議委員会議事録

1. 開催日時： 令和元年 8 月 29 日（木） 12 時 40 分～14 時 00 分

2. 開催場所： 株式会社ジュピターテレコム会議室 3 階 Room1 会議室

3. 委員の出席：

委員総数： 7 名

出席委員数： 7 名 ※うち 2 名書面審議

出席委員の氏名：

（敬称略、五十音順）

植田 益朗、音 好宏、片山 哲郎（※書面審議）、砂川 浩慶（※書面審議）、

村上 憲一、中川 幸美、吉岡 忍

放送事業者側出席者：

株式会社インタラクティブィ

代表取締役社長 長谷 一郎

ジュピターゴルフネットワーク株式会社 <ゴルフネットワーク>

代表取締役社長 前田 鎮男

取締役 編成部長 兼 制作部長 石上 健治

制作部プロデューサー 横川 詠一

チャンネル銀河株式会社 <チャンネル銀河 歴史ドラマ・サスペンス・日本のうた>

代表取締役会長 柳 昌之

代表取締役社長 寺嶋 博礼

取締役 部長 秋元 美加

事務局：

株式会社ジュピターテレコム

DTH 営業部 高木 明夫、野々口隆介、細江央輝、森井 健策、田口 聖美

4. 議題

株式会社インタラクティブィで放送する 6 チャンネルの内、「ゴルフネットワーク」、「チャンネル銀河 歴史ドラマ・サスペンス・日本のうた」の番組内容、編成内容について。

5. 審議内容

① 「ゴルフネットワーク」の編成およびオリジナル番組『ギア猿 #26』について、各委員より以下のような意見・質問がなされた。

- 熱心なゴルファーではないが、アメリカのPGAショーの紹介、また現地購入の実施評価で構成されており、素人にとって物珍しく面白かった。
- ギアに注目したコンセプトが良い。ゴルフ用品の奥の深さを感じた。もっとばかばかしい商品があっても、笑いをとるような商品をさりげなくラインナップに追加してもメリハリついたのでは。
- 随時、練習場の4人のコメントを挿入して、PGAショーレポートを飽きさせない編集の上手さがあった。「キャスティングに視聴者視線を徹底する」という企画主旨が表れている。
- MCの華丸氏が、ゴルフが好きということが画面にでていてよかった。また、ゲストのずん飯尾氏とのキャラクターの全く違う2人のやり取りも面白く絶妙。飽きずに見ることができた。ティーチングプロ関氏のキャラクターも、場の雰囲気が和みすごくよかった。
- カリー・ウェブとの対決、「なにこれギア」のコーナーは、ゴルフ興味なくても面白かった。
- 練習場でティーチングするのではなく、芸人、レッスンプロ、クラブフィッターにギアの解説をさせたのは、番組の作り方として挑戦的。実際の海外ロケには有名人を連れて行かず、スタジオ替わりの練習場であれだけ見せきったというのは感心した。
- 前半、出演者が新商品をトライして感想だけでは言っていないのはつまらない。このドライバーを使うと軌道や弾道がこう変わるといったような、素人がみても「なるほど」と思える科学的な分析やウンチクをプラスしてもよかった。
- 試打風景に、弾道を色付きのラインで示すショットトレーサーや、弾道データを紹介するトラックマンの数値を入れるなど、あったほうがよかった。
- 現地でのやりとりに関し、出演者は英語が苦手だったこともありコミュニケーションが取れておらず流れが止まって画面が死んでしまっていた。番組としてクオリティーをあげるならば、相手が何を答えたかがわからなくても、笑いを取るくらいのこちらからの質問など、もう少し工夫がほしい。
- そもそもPGAショーとは？という説明がほしかった。
- 「どこに視聴者がいるか」を制作するときに忘れがち。モーターショーなどと比べ、対象が小さいだけの華やかにはなりにくい。フォーカスをつくるポイントや見せ方が作りにくいということをおかかったうえで、画的に映えるものは何かを考えて作ってほしい。
- 複数台のカメラを使っていたが、別のカメラが移りこんでしまった。少し雑に感じてしまい残念。
- 本編との関係性も興味があるので、どんなCMが入っていたのかも知りたい。
- 番組コンセプトのひとつである「ビギナーでもわかるゴルフグッズの紹介」という主旨に適ったものであるとの印象を受けた。世界最大のゴルフ見本市を飽きさせず、平易に紹介したものだと思う。ただし、番組を批評する立場になると、何とも論評に困るといのが本音。番組では、多くのメーカーの新製品を紹介しているが、尺が長いものと短いもの、あるいは社名だけを紹介してスルーするものなどがあつた。メーカー協賛のタイアップではない場合、尺設定の取捨選択をどのような判断でしているのか。この点に興味を持った。
- 日本人バイヤーが単身来場していたが、彼の密着レポートがもう少し長くあるとよかった。

<事業者回答>

- 関雅史氏、鹿又芳典氏らの仲が良いメーカーはあるが、いろんなメーカーをフェアに付度せずを選ぶフィッターで有名な2人である。尺が長いメーカーがあったというのは、付度やタイアップなどではない。取材に協力的ではないメーカーもあるなかで、彼らが仲の良いメーカーだと自由に取材をさせてくれ、良い内容が撮れたという側面はあった。
- 番組として面白くするには、業界の方との関係性構築も必要。だが、商品に対しては、常に視聴者目線で正直な意見を伝える。そのバランスをとることが重要である。
- CMの中身に関する意見があったが、本編とは関係のないCMを流している。
なお、「ギア猿」は、タイアップはやらないという方針。もし実施する場合は切り出して別番組でやっている。

② 「チャンネル銀河 歴史ドラマ・サスペンス・日本のうた」の編成およびオリジナル番組『五木寛之 歌いながら歩いてきた #1』について、各委員より以下のような意見・質問がなされた。

- 企画の勝利ともいえる審議対象番組であった。聞き手の宮下康仁氏との長い付き合いが伺え、視聴者としても安心して聞くことができた。
- 五木寛之氏の作品と好きな楽曲・作詞された楽曲を実際にリンクさせ、楽曲のエピソードとともに、当該曲を聴く五木氏の表情も見ることができ、構成の良さが出ていた。
- 番組は、ほどよく話す、ほどよく歌を聴くというバランスが絶妙で心地よかった。これらの楽曲が「商品」ではなく、時代相の記録としての価値があるのだと感じた。
- 10回シリーズで完結できたのかが気になるところで、続編があれば期待したい。
- ラジオ深夜便を映像化したような大人しい番組。映像がはねなくてもこういう番組があってもよい。
- スタジオの代わりにラジオブースで収録し、映像はジャケット、出演者はMCと五木のみ。コストカットという意味でも非常に挑戦的で挑発的であった。
- 全4曲を知らなかったものの、57才の当方世代でも十分に楽しめる内容であった。曲を流している最中、レコードジャケットとプレーヤーの映像だけで、その時代のニュース映像等を挿入しないことも、簡素でいい。
- 五木氏も好きだし曲も好きだったので、見るのがとても楽しみだった。しかし、もっとその時代のことや、五木氏が歌に込めた想いが語られるのではという期待に反し、少し淡泊であった。
- 第一印象は、番組構成、画面、構成作家のキャラクターも含めて「古いな」「お金かけてないな」というイメージ。
- 最初の10分ほどはやや退屈な印象を受けた。進行役の宮下康二氏の話の「ウケ」が無難で、五木氏の深い話になりそうな機先を制して、歌の話に戻す意識が強すぎるように感じた。見ているうちに、これはラジオ番組のスタイルで、歌が主、会話が従であるという意図が分かった。
- 五木氏は、高いテーマ性を詞に落とし込み、未来に残していきたいという作詞に対する姿勢がある方なので、難解にする必要はないと感じつつも、もう少しエンタテインメントしてもよかったのでは。
- 「先生」と褒めるのではなく五木氏をもう少し追い詰める部分があったほうが番組として面白い。
- ラジオ風ということだが、わざわざカメラで撮る必要があったか？
- 「青年は荒野を目指す」以降見るのがひけてしまった。50・60年代当時の写真を差し込むなど、映

像的に一工夫ほしかった。

—聞き手は、五木氏を良く知っているだけに、あまり質問をしていない。好奇心のある女性や、50代、60代の好感度があるタレントなど五木氏を知らない人でも良かったのでは。

どっちがいいということはないが、ターゲットは、尖った層なのか、一般層なのか番組の位置づけをどうするのかで番組の作り方が違ってくる。MCにしても、ターゲットをどちらにするかを考えて選んだほうがよい。

<事業者回答>

—「見てもらう番組」も大切だが「遺す番組」もCSにあっても良いのではないかという思いがあり制作した番組。

—低予算であるということを五木氏が理解してくれ、彼の心情を最大限出しやすい設計をし、あのラジオ形式が出来上がっていった。

以上